レジェンズ学園七不思議

陽炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レジェンズ学園七不思議

【Ｎコード】
Ｎ２２５７Ｓ

【作者名】
陽炎

【あらすじ】
レジェンズ学園に七不思議があることを知ったシュウたち。
それを解明しよう！と真夜中の学校に忍び込むが・・・。

レジェンズ学園七不思議？

ここは、人間とレジェンズ両方が通う高校、レジェンズ学園。そのせいか、学園ではお茶目な騒動が毎日のように起こっている。たとえば、今日は・・・・・・。

「なーなー、昨日の『ホントにあったかもしれない怖い話』スペシャル見たかー？」
朝っぱらからやかましく騒ぎまわっているのはシュウ。学校でも1，2位を争う問題児である。
「あ、見た見た！すっごい怖かったんだな！」
マックが花に水をあげながら答える。美化委員としての仕事でもあるが、彼の場合植物が好きだからやっているのだ。
「うーん、でもああいうのってなかなか日常では起きないからどーしてもリアリティがないのよね～。」
メグが少し気だるげに言うと、
「ああ、それはあるな。霊感でもないかぎり、幽霊とか超常現象とか、身近にあるもんじゃねえしな。」
机に堂々と足をかけて座っていたシロンがそれに同意した。
「そもそもあんなもん怖ぇのか？俺には分かんねぇぜ、なあガリオン、ディーノ？」
いつのまにやら会話に混じってきたグリードーがガリオンに同意を仰ぐ。
「所詮あんなものはテレビ局が高視聴率を狙って作ったものだからな。一般の者なら怖がるであろうが、私も何が怖いのか分からない・・・これシロン、机に足をかけるでない。」
ガリオンが言うと、シロンは「へいへい」といいながら机に頬杖をついた。
「僕もだね。人は死んだらあっというまに消えてしまうだろうしね。

」
ディーノがバラの香りを嗅ぎながら答えた。
「んだよウサギ委員も会計委員も給食委員も風紀委員も副会長も！お前らは幽霊とか超常現象に神秘を感じねぇのかよ！」
シュウがジタバタと暴れだす。
「何も感じないわよ。それより、そろそろウサギ委員じゃなくてまりも委員に変えたほうがいいと思うんだけど。」
「あ、そういやメグ、まーくんの世話、もうやったのか？」
「やっといた・・・ていうほど、たいした世話じゃないわよね。」
メグが指差す先には、日当たりのよい窓辺におかれた金魚鉢があり、中に直径２０センチはあろう巨大まりも、通称「まーくん」が太陽の恵みを受けて光合成を行っていた。
「ていうか、それはおいといてさ！何だよ！お前ら幽霊とか超常現象を信じねぇのかよ！」

「僕は信じるんだな。」
「あたしはそういうの無いと思う。」
「俺も。」
「僕も賛成だね。」
「俺もだ、ディーノ。」
「そんなものがあるはずなかろう。」

「マック・・・・俺の味方はお前だけだよ、うう・・・。」
シュウがマックに縋り付いてすすり泣き始めると、シロンが頭の後ろをガリガリと掻きながら言った。
「お前さっきから幽霊だの超常現象だの喚いてるけどさ、お前はそういうの体験したことあるのか？」
うっと言葉に詰まるシュウを見て、さらに言葉を重ねる。
「体験したことも無いくせに、何でそんなこと信じられるのか、分かんねぇな。俺たちの身近にそんなこと起こったことねぇだろ。こ

の学校はフツーもフツー、平凡な生徒が通う平凡な学校なんだぜ？」
ちなみに背後ではガリオンが「平凡な生徒」とシロンが言ったとき、首をブンブンと振りながら、「どこが平凡だ」というようにシロンをジトッと見つめていた。
「で、でも・・・でもさ、七不思議とかは、身近じゃねぇか！？」
シュウが最後の反論を試みた。が、
「お前、この学校の七不思議とか聞いたことあるのか？」
シロンが言うと、シュウは黙り込み、壁際でいじいじといじけてしまった。
「ほらな、この学校に七不思議なんて」

「ありますわっっっっっ！！！！！！！！！」

突如、大声がB組の教室内に響き渡った。皆が声の出所を探していると、天井のほうで「ガパッ」という何かがはがされるような音がして、天井から金色の何かが落ちてきた。
金色の何かは音も立てずに床に着地したかと思うと、電光石火のスピードでシロンに抱きつこうとした。
「シロンさんっっっ！！！」
シロンはそれを避けようとした・・・が、如何せん、スピードが速すぎた。
2，56秒後、シロンは椅子ごと金色の何かとともに床に倒れた。
「シロンさん、お久しぶりですっ！また会えるなんて嬉しいですっ！」
「お、おうハルカ・・・・・念のため言っとくと最後に会ったのは昨日だ・・・・ていうかお前、どこに潜んでやがったんだ・・・・。

」
「ハルカはシロンさんのいるところなら例え火の中水の中、天井裏でも床下でも金魚鉢のなかにも潜んでいます！」
最後のあたりはもはや人間じゃないと、全員が心の中でツッコんだ。
「これぞ、愛の力です！」
いや、ただのストーカーだろうと、全員が心の中でツッコんだ。
「ていうか、そんなことよりハルカ、この学校に七不思議があるってホントか！？」
シュウが目をキラキラさせながら、倒れて目を回したシロンそっちのけでハルカに質問した。

レジェンズ学園七不思議？（後書き）

やー、何かありがちなネタだ・・・・。
できればこの話に最後までお付き合いしてやってくださいませ　m
（　）m

レジェンズ学園七不思議？（前書き）

やっと気づきましたが、この作品は１００％ギャグです。

レジェンズ学園七不思議？

「ええ、本当よシュウ君。」
ハルカが優雅に身を起こし、長い金髪を背中に払いながら答えた。
彼女は学校でも1，2位を争うほどの美貌を持つが、何故か学校で1，2位を争う問題児のシロンにベタ惚れしてしまっているという残念美人だ。しかも、シロンへのストーカー行為（本人はあくまで求愛行動と主張）が日々過激化してきてしまい、学校でも1，2位の変人になりつつある。
「っておい、ハルカ。それ本当かよ？」
シロンが頭を抑えながら聞くと、
「はいっ！本当ですシロンさん！！」
ハルカは途端に元気良く答えた。
「え？それってどういうやつなの？」
メグが尋ねると、ハルカは手帳を取り出し、パラパラとめくり始めた。
ハルカの持つ手帳には教師の月給から各生徒の個人情報、趣味に至るまで事細かな情報が入っている。
前にシュウは、どこからそんな情報を集めてくるのかとハルカに聞いたことがある。が、
「・・・・教えてもいいけど、あなた、危ないところに落ちるかもしれないわよ？」
と言われ、いろんな意味で妖しげに微笑みかけられた。
それ以来、シュウは同じ質問をしたことがない。
「あったあった！」
ハルカが嬉しそうに声を上げる。どうやら探していた情報が見つかったらしい。
「1つ目から言っていくわね。」
ハルカが言うと、シンと静かになった。

「1つ目！何故マヌケな顔して学年最下位のシュウが生徒会長なのか。」
「ストォォォォォォォップ！！！それは単なる悪口だと思います！」
「いや、事実だろ？」
「でも、こないだの定期テストはシロンが最下位だったぞ！」
「うっせぇ黙ってろ！！」

「2つ目！何故学校1，2番の問題児であるかっこいいシロンさんが生徒会副会長なのか。」
「おい待てコラ。俺はシュウと同じ扱いか。」
「カッコいいって、なんでシロンだけほめてるんだよ！ハルカが付け加えただろ！？」
「だが、私は前々から不思議に思っておったぞ。なぜお前らのような者たちが生徒会役員になれたのであろうとな。」
「確かにな、ガリオン。俺もなんでこんなバカどもが生徒会役員なのか、ずっと不思議だったんだ。」
「「グリードー、テメェおもて出ろや！！」」

「3つ目！扇風機委員っていったいどんな仕事してるのか。」
「あ、それ私も気になってた！」
「扇風機委員って仕事内容を絶対に口外しないから、謎なんだな。」
「シロン、お前がランシーンに聞けば分かるんじゃねえの？あいつ扇風機委員だろ？」
「ヤダね。」

「4つ目！夜の加工室で、何かを燃やすような音と、誰かの笑い声が聞こえてくる。」
「燃やすって、何を？」

「ありがちなネタとしては、死体を燃やしてるとかじゃねえか？ディーノ。」
「お前が燃やしてんじゃねえのか？ほら、尻尾の炎で。」
「シロン、テメェあとでツラ貸せ。」

「5つ目！月夜の晩、屋上にニタリと笑った怖い顔の怪人が出る。」
「・・・ちょっと怖いかも・・・・。」
「メグ、守る！」
「ズオウ、あんたいつの間に来てたの！？」
（作者が登場させるの忘れてただけです。）

「6つ目！夜の教員用女子トイレに、仮面をかぶった幽霊が出る。」
「幽霊？リアリティねえな、おい。」
「いーじゃんいーじゃん、やっと怪談っぽくなってきた！！」

「7つ目・・・」
「ちょっと待って！7つ目って言っていいわけ？呪われるとか言うじゃない！」
「分かったわ。6，3個目！」
「「「6，3！？」」」　（全員）
「B組のまりも、まーくんが毎晩変身する。」
「まーくんが？それはないだろ。」
「ていうか、そもそも何になるんだよ。」

「・・・とまあ、以上になります。」
ハルカがパタンと手帳を閉じて言い終わると、シュウがあたりを見回しながら尋ねた。
「なあ、みんなどう思う？」
「俺はシュウほど最下位にはなってねぇ。」

「独特ではあるわよね。」
「結構怖かったんだな。」
「信じ難いね。」
「まーくん、まりも！」
「何を燃やしてるんだ？」
「最初の２つが一番不思議だと思うぞ。」

と、各々の感想が返ってきた。
「この学校にも七不思議とかあったんだなぁ！！！！」
「聞けよ！人の話！」
グリードーが全く話を聞いてないらしいシュウにツッコむが、シュウはまたもや聞かずにはしゃぐ。
「でもよぉ、どれも確証ないし信じられねぇな。」
シロンが言うと、シュウはとたんに食いついた。
「なんでだよ！あるよ、絶対！」
「ねえだろ。」「ある！」「ねぇ。」「あるって言ったらある！」
シュウとシロンが不毛な言い争いを繰り広げていると、マックがぽん、と手を打った。
「そうだ、そこまで言うなら、夜に学校に忍び込んで解明してみるんだな！」
「おお！ナイスアイディアだマック！」
途端にシュウがマックに抱きつく。そして、
「おーい、今日、一緒に夜の学校忍び込むやついねぇかー？」
と周りに聞いた。
「俺はパス。」「あたしも。」「僕もだね。」「ズオウも。」「俺もだ。」「私も遠慮する。」
「よし、シロンとメグとマックとキザ夫と会計委員と給食委員だな！」
「聞けよ！人の話！」
「僕はディーノだ！」

グリードーとディーノがツッコむが、シュウは聞く耳を持たない。
「ほんじゃ今日の夜１０時、校門前に集合だ！」
と叫んだかと思うと、どこかに走り去っていった。
「まったく、本当にあいつはバカなんだから！」
「シュウ・・・カッコいいんだな。」
「冗談じゃねえぞ、ったく！」
みんな愚痴をこぼすが、何やかんやで行くムードになっている。そういうクラスなのだ。
「夜の学校かよ！なんでそんなかったるいこと・・・！」
シロンが珍しく本気で声を荒げているのに気づき、ガリオンが尋ねた。
「シロン、お前もしかして・・・怖いのか？」
その瞬間、シロンはぎろりとガリオンをにらみつけた。
「あ？んだと？お前は行くのかよ、ガリオン。」
「あの小僧は放っておけば何をしでかすか分からぬ。私が見張っておくほうがまだマシだろう。」
渋々と言ったようにガリオンは答えた。
「ところで、お前は来ないのか？本当に怖いのか？」
ガリオンが言うと、シロンは鼻息も荒く立ち上がって言った。
「行くよ！行きゃあいいんだろ！」
「シロンさんがいくなら私も！」
ハルカが嬉しそうに手を上げた。

レジェンズ学園七不思議？（後書き）

長い・・・・。
しかも読みにくい・・・・。
許してください。

レジェンズ学園七不思議？（前書き）

長い上に読みづらく、しかも展開が遅いです。
許してください。

レジェンズ学園七不思議？

「よーし、全員集まったな！？」
シュウがテンションマックス状態で確認を取った。
今は夜の１０時２分。満月の照らされた学園の校門付近には９つの影がゆらめいていた。
「集まったっていうか、集められたんだけど。」
メグが言うと、シュウは言い返そうとした。が、先に口を開いたのはシロンだった。
「何でもいいけどよー、とっとと終わらせんぞ、こんなくだらねぇこと。」
何故かものすごく不機嫌そうなシロンに皆首をかしげた。その仕草に昼間のことを思い出したガリオンは、シロンに問いかけてみた。
「シロン、そなた・・・本当に怖いのか？」
「あ！？ふざけてん・・・」
「え！？マジで！？」
シロンがいきり立って反論しようとしたとき、シュウが目をキラキラさせながら言った。ほかのメンバーには聞き取れなかったらしく、
「怖いわけあるか！！」
シロンが怒鳴り散らすが、シュウはうんうんとうなずいて、
「いやいや、遠慮して本音を我慢する必要はないんだよ、副会長。怖いなら怖いとはっきり言ってくれればよかったのさ。さて、皆に『シロンはお化けが怖いからけっせ」
そこまで言って、シュウは言葉を止めた。いや、止められた。シロンの大きな手が、シュウの頭を思い切り握りつぶそうとしていたからだ。
「おいシュウ。今すぐ死ぬか、あとで死ぬか。どちらかを選べ。」
シュウの頭蓋骨がミシミシと音を立てる。その音にシュウはとてつ

もない恐怖を感じた。
「い、いやだなぁ副会長～。冗談だって～。」
何とかその大きな手をどけると、にこやかに話しかける（足は震えていたが）。
「おい、選べ。」
「よ、よーし全員いるな！？今すぐに忍び込むぞ！！！」
「今すぐ？」
「今すぐだ！！！！！」
皆が見た物は、顔をひきつらせて震えているシュウと、その後ろで悪霊のようなオーラを発散しているシロンだった。

「あー・・・・・ところでさ。」
シュウが昼間にどこからか取り出してきた梯子（どこかに走り去ったとき、これを取りに行っていた）で校内に入り、昼間のうちにあけておいたらしい空き教室の窓から忍び込んだ後、ディーノが聞きにくそうに口を開いた。
「ん？どしたキザ夫？」
「ディーノだ。ところで・・・あの、親に夜中の１０時に出かけるって言ったのに、何の反対もなかったんだよね・・・。」
「よかったじゃねぇか。」
「いや、それだけなら良いって言うか、家を出るとき涙ながらに『死なないでっ！』って送られたんだけど・・・。」
「・・・よかったじゃねぇか。」
「いや、全然よくないからね？」
ディーノが引きつった笑いを浮かべながら言うと、ほかのメンバーからも声が上がった。
「あ、俺もだ。」「あたしも。」「僕もなんだな。」「俺もだ。」
「僕も。」「私もだぞ。」
「・・・シュウ、何かしたのか？」

「いや、俺は別に・・・ただ・・・」
「ただ？」
「・・・ハルカに、夜中出掛けても怒られないようにしといてって言った、かな・・・。」
「・・・・・。」
全員、恐る恐るといったようにハルカを見やった。
ハルカは気づいているのかいないのか、にっこりと微笑んだ。

「そろそろ加工室だよな～。」
一行は以外に広い校舎内を歩きに歩いて、とうとう第４の不思議が眠る場所、加工室の近くまで辿り着いた。
「もうついた・・・・」
突然シュウが立ち止まった。その背中にシロン、メグ、マック、ディーノ、ハルカ、グリードー、ガリオン、ズオウといった順に鼻の頭をぶつけた。
「ちょっと！何立ち止まってんのよ！」
メグが怒鳴ると、シュウは「あの・・・」と小さな声でつぶやいた。
「何か、誰かの笑い声と、変な音が聞こえてくるんスけど・・・。」
「「「え？」」」
思わず全員が問い返すと、シュウはあわてて「しーっ」と指を口にあてた。
「ほら、何か・・・聞こえてこないか？」
2，3メートル先の加工室から聞こえてくる声・・・・それは紛れもなく誰かの笑い声と、轟々という音。
「え・・・？嘘でしょ、ほんとにオバケ・・・・？」
「ほ、ほんとうにいたんだな・・・」
「ま、まさかだろう？」
「・・・・不審者かもしれんな・・・。」
「何を燃やしてるんだ？」
「・・・でも、メグ、守る！」

「新手のレジェンズかしらね？」
一同から小声で不安の声（約二名は違ったが）が挙がり始めるが、その声は怒鳴り声（小さめ）によってかき消された。

「うるせえな！幽霊だの怪奇現象だの、そういうのがないってことを証明するために来たんだろうが！いちいちビビッてんじゃねぇよ！！」
怒鳴ったのはシロンだった。その妙に苛立ったような声に、思わず皆沈黙する。
「・・・というわけで、シュウ、お前がドアを開けろ。」
「副会長、あれだけカッコいい啖呵切っときながら、開けるのは俺ですか？」
「いいから先にテメェが行け。」
「はい・・・・。」
凄まれてシュウはうなずくしかなかった。
「シロンさん・・・・カッコいい・・・。」
ハルカがうっとりとシロンを見つめていた。

シュウはもうヤケクソだった。幽霊などの存在を証明したくてここまで来たが、考えてみれば覚悟なんて一切しておらず、本物が現れるなんて「ふざけんなよ！」と言いたいが考えてみればこうやって皆を集めたのは他ならぬ自分自身であってああもう考えるのもメンドくさい。

シュウは「臨・兵・闘・者・！」と叫びながら加工室のドアに手をかけた。
「皆・陣・烈・斉・禅！！！！！！！！」
ほとんど泣きながら引き戸を思い切り開けると同時に、後ろからは「ぎゃあああああああ！！！」という複数の声が聞こえてきた。
ドアを開けた瞬間、轟々という音が数倍に膨れ上がった。

そして、ドアの向こうにいたモノは――――――――――。

「・・・・・貴方達、そこで何をやってるんです？」

レジェンズ学園七不思議？（後書き）

前置き長いし、すべてのキャラを使いこなせてないですね・・・。

レジェンズ学園七不思議？

「・・・あなたたち、いったいどうし」
「「「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！」」」　（約全員の悲鳴）
「・・・とりあえず落ち着」
「「「うぎゃあああああああああああああ！！！！！！！」」」（約全員の叫び）
「・・・・・・・・・。」
「うごばっっっっ！！！」　（シロンが誰かに殴り飛ばされた音）

シロンが音を立てて吹き飛んだとき、ようやく全員が落ち着きを取り戻した。
そしてようやく、扉の所に立っている人物を直視した。
「・・・・あなたたち、いったい何してるんです？」
「ラ、ランシーン・・・？」
加工室の扉の前に呆れた顔をして立っていたのは、シロンの双子の兄、ランシーンだった。

「いてえな！何しやがる！ていうかお前こそ何やってんだよ！？」
殴り飛ばされたシロンが起き上がり、頬をさすりながらランシーンを睨む。
それに対しランシーンはやれやれとため息をついた。
「実の兄を『お前』呼ばわりですか・・・本当にシロンは単細胞ですね。」
「あ？んだともっぺん言ってみ」
「なんかすっげー音がするけど、何やってんの？燃やしてんのー？」
「こ、こら勝手に・・・！」

シロンとランシーンが火花を散らしている間に、シュウは加工室に勝手に入って行った。
そこで目にしたものは――――――――――――――。

「せんぷう、き・・・・・？」
轟々と燃えるような音を立てていたのは――――長さ約1メートルはあろう巨大な羽を5つくっつけた扇風機だった。
「・・・シュウ、何をしている？」
「うおっ！？いたのかリルナっ！？」
「・・・・・手伝ってるから・・・・・・。」
いつの間にいたのか、黒髪黒瞳の少女、リルナが膨大な量のメモを抱えてシュウの後ろに立っていた。

「ふむ、燃やすような音というのは、巨大扇風機の音であったのだな。」
「何かを燃やしてるんじゃなかったのかよ。」
「何だ、お化けなんかじゃなかったのね。」
お化けじゃないと分かって安心したのか、次々にみんなが加工室に入ってくる。

「しっかしよー、ランシーン、なにやってたんだ？」
シュウが聞くと、ランシーンは誇らしげに胸を張りながら言った。

「見れば分かるでしょう？新型巨大扇風機の開発ですよ。」
「・・・・・なんでだ？」
「だから、新型巨大扇風機の開発のためです。」

いやそういうことを聞いてるんじゃなくて、と全員が思ったが、誰も言わなかった。

学校１の天才であるランシーンは、何故か扇風機に凄まじいこだわりを持つ。
ランシーンが教室に設置してある扇風機について、ＪＪに文句を言ったことがある。
最初はＪＪも軽くあしらっていたが、それが文句から今後の扇風機の方向性に話が移り、３時間が経過した時、ＪＪは白旗を上げ、教室に新しい（ランシーン一押しの）扇風機を設置した。
この話は伝説として語り継がれている。

「どうして、ここで、こんな時間にやってるんだ？」
「加工室は工具の設備がいいですからね。家でやるよりここでやるほうがいいんです。」
「・・・・夜にやってるのは・・・・・・・バレない為・・・・。」
「「「バレないため？」」」」
リルナが言うと、全員が不思議な顔をした。

「・・・・使用許可も取ってないし・・・・・・先生とか警察に見つかったら・・・・・困るものもあるから・・・・・。」

「「「・・・・・・・・・・・・。」」」

皆が黙り込むと、やれやれといった風にランシーンが言った。

「人類の躍進のためには、多少強引なことも必要ということですよ。」

新型扇風機の開発が何で人類の躍進になるんだとは、誰もツッコめなかった。

「・・・・・昔からこうなんだよな。」

シロンがぼそりと呟いた。

一同はランシーンとリルナに「俺たちがここにいたことを誰にも言わないでくれ」と言って、加工室を出て、屋上に向かった。

リルナは普通に頷いたが、ランシーンが妙な笑みを浮かべたのが気になった。

「何よ、結局幽霊でも怪奇現象でもなかったじゃない！」

メグがシュウに文句をいうと、シュウは噛み付いた。

「うっせーな！まだあと2つか3つあるんだよ！ていうかあれはあれで十分こえーだろが！！」

「・・・それは確かにいえるんだな。」

「しかしよー、結局来てみりゃただランシーンが（人には言えない）

扇風機を作ってるだけだったな。」
グリードーがつまらなさそうに言った。
「まあ、確かにある意味恐ろしくはあったが・・・・。」
「ある意味ではね。」

一同が口々に文句を言っている間に、あっというまに屋上の扉までついた。

「よーし、ほんじゃ入るぞ・・・・って、鍵かかってら。」
シュウがドアノブをガチャガチャと回して舌打ちした。
「あ、鍵ならここよ。」
「お、ハルカ、サンキュ。」
ハルカがどこからか鍵を取り出したが、その件に関しては誰もツッコまなかった。
しかし、ハルカを除いた全員の背中に、冷たい汗が流れたことは言っておこう。

「よし、シュウ、お前が先に行け。」
「またッスか？」
「いいから行け。」
「はい・・・・・。」

屋上の扉がギィと音を立てて開く。
夜空には大きな満月が不気味なほど黄色く輝いており。
月光に照らされた屋上に、誰かが立っていた。
その誰かは、ゆっくりとこちらを振り向き――――――――――――にっこりと笑いかけた。

レジェンズ学園七不思議？（後書き）

文章がおかしくてすみません。
やっぱり慣れないなあ・・・・・。

レジェンズ学園七不思議？

雲の切れ間から満月が顔を出し、顔を歪めた人物（？）をはっきりと映し出した。

血のように赤い髪。
ぎょろりとして大きく、見るだけで思わずびくりとする目。
そして大きく裂けた口元から覗く、獲物を引き裂く為の鋭い牙・・・。

「「「ぎゃ嗚呼あああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」」」

加工室の時の悲鳴とは比にならないほどの大きな悲鳴が、屋上に響き渡った。
あのハルカやガリオンですらも本気の悲鳴を上げている。
「ははははは、早く逃げっ・・・・・・！！」
屋上の入り口に逃げようとしたが、皆がいっせいに押し寄せたため、ぎゅうぎゅうに詰まってしまった。
そこでジダバタしている間に、その人物はゆっくりと近づいてくる。

「いやだぁあああああ！！まだ死にたくねえ！！！」
「早くしろよ、このバカ！」
「バカって言うなキザ夫！」
「は、早く出てよぉ！」
「ヘルプミーなんだな！」
「メグ、守る！」

「ええい、早くせんか！このままでは全員が・・・！」
そこでジダバタしている間に、その人物はゆっくりとさらに近づいてくる。

「落ち着け、お前ら！とりあえずここは、」
「副会長、何かいい考えがあるのか！？」
「シュウを生贄にして逃げるんだ！！」
「この鬼畜！！親友を犠牲にして逃げるのか！！」
「お前仮にも生徒会長だろが！身を挺して生徒を守れや！」
「俺も一応生徒なんだけど！？」

そこでジダバタしてる間に、その人物はゆっくりとさらにさらに近づいてくる。

「あ、あれ、グリードー？どこ？」
そういえばグリードーが見当たらないと、ディーノがあたりをキョロキョロ見回す。
すると、グリードーがその人物にゆっくりと近づいていっているのが見えた。
「グ、グリードー！？危ないよ、逃げて！！！」
ディーノが叫ぶと同時に、グリードーが足を止めた。顔を歪めたまま、その人物も止まった。
そして、口を開いた。

「よお、グリたん達、ここに何しに来たんだ？」
「その気色悪い呼び方やめろ。リーオンこそ、そんな怖い顔して何

やってるんだ？」

「「「「・・・・・・・・・へ？」」」」

動きが止まる一同。

「怖い顔って・・・・酷くねえか？笑ってんのに。」

「え？それ笑顔だったのか？顔が変に歪んでる様にしか見えねえよ。」

「グリたん・・・・酷い（泣）」

「・・・・・・え？リーオンだったの？」

ディーノが恐る恐る呼びかけると、リーオン（らしきもの）が朗らかに声をかけてきた。

「お、ディーノ坊ちゃんじゃないスか。何してるんスか？」

「「「「リーオオオオオオオオオオン！！！！？？？？」」」」

「・・・・で、図書委員、お前ここで何やってたんだ？」

なんやかんやで全員が落ち着いたあと、シュウがリーオンに尋ねた。

「え？いや、それはその、アレだよ。」

途端に恥ずかしそうにもじもじとするリーオン。ちょっと気持ち悪いと全員が思ったが、デリケートなリーオンを気遣い、誰も言わなかった。

「え、笑顔の練習だよ！」

「「「笑顔の練習？」」」

「いや、ほら、よく顔が怖いって言われるから・・・笑顔くらいは怖くないようにしたいと・・・。」

「「「・・・・・・。」」」

「さっき、俺を見た瞬間悲鳴上げてたけど・・・そんなに怖かった？」

不安そうな顔をして聞くリーオン。そんな彼に、

「い、いや、図書委員の顔が怖かったわけじゃねえよ。」

「そ、そうよ。ただ、リーオンさんの後ろにゴキブリがいただけよ。」

「リーオンの笑顔は、と、とても素敵だったんだな。」

「大丈夫だよ、リーオン！（汗）」

「・・・・・・・・・うむ。」

誰が真実を言えるだろうか。

「あ、ほんと？良かった、人目を忍んで夜の屋上で練習した甲斐があったぜ！」

心から嬉しそうに笑う（怖い）リーオンは、皆の顔に浮かんだ罪悪感に気がつかなかった。

一同は黙りこくって夜の校内を歩き回った。
さっき見た刺激物の影響&罪悪感で何も喋れなかった。
そして、六つ目の七不思議の舞台である教員用女子トイレの前に来て、シュウがやっと口を開いた。

「じゃ、女子トイレだから、給食委員が入って確認してきてくれるか？」
「承知した。」
「・・・ちょっと待って？あたしは？」
「え？あ、そっか、メグって女だっ」
「女じゃい！！！！」
「ぶふおっっ！！」

そんなこんなで大騒ぎしていると、ふいに女子トイレからカツカツカツと足音が聞こえてきた。

「「「・・・・・・・・・・・え？」」」

ギイ・・・・・・・・

中から出てきた人物は――――――――――――――――白い仮面を被っていた。

レジェンズ学園七不思議？（後書き）

内容薄っ！！
すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2257s/

レジェンズ学園七不思議

2011年10月8日23時34分発行